
海に浮かぶ家

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海に浮かぶ家

【Nコード】

N2299T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ある漁村で、漁師見習いの青年は、黒髪の女性に声をかけられた。それから、無口な青年と、積極的な女性との関係が始まる。青年の友人も交えて、それぞれの事情がほのかに絡み合う。

サイト、dノベ転載

始まり

「こんにちは」

女性の声が聞こえたが、裕二は自分には関係ないだろうと、気にせず作業を続けていた。

「こんにちは！」

その女性が、自分に声をかけているのだと気づいたのは、二回目の声がかかり近かったからだだった。

裕二は驚いて、顔を上げた。

すると、船が止まっているすぐそこに、艶やかな長い黒髪を持つ着物の女性がいた。

「気づいてくださいましたか。 こんにちは」

「あ…… ああ、 こんにちは」

裕二は、何だかわからず、とりあえず返事をした。

「私、千代っていいいます。この町の近くの、あの山にある家に住んでいます」

「……あの山って、あれは地主さんが住んでる……って……えー？！」

「私、桂木千代って言うんです。そうです。ここの地主の娘なんです」

「え、えーと、桂木さんの娘さんが、な、何か用ですか……？」

裕二はあからさまに動揺した調子で聞いた。

しかし、千代は気にした様子はなく、変わらない笑顔だった。

「私、本当は別な町の大学に通つてて、夏休みでこちらに来てるんです。ただ、実は小学校からその町の学校に行つてて、ここにいたのは本当に小さい頃だけで、何も覚えてないんです。それで、今町を歩いていたところなんです」

「そうですね。町に比べたら、あまり刺激的なものはないでしょうけど」

「でも、落ち着きます。この時間がゆっくり流れている感じがとても好きです」

「それはよかったです。ぜひこの町を楽しんでいただければと思います」

「それで、私、貴方をお願いしたいことがあるのです。よろしいですか？」

「何でしょう？」

「私を、船に乗せてもらえませんか？」

「……はい？」

裕二は聞き間違いかと思ひ、思わずとぼけた顔をしてしまった。

「いけませんか？」

千代の笑顔が少し曇った。

これはどうやら聞き間違いではないようだ。

裕二は慌てて返事をした。

「い、いえ！……えーと……あまり良い場所ではありませんが、よければ、どうぞ」

そう言うと、裕二は手を差し出した。

千代は嬉しげに笑みを濃くして、裕二の手を取った。

彼女のその小さな花を思わせる笑顔と、触れた手の柔らかさに、裕二は少し緊張し、手に汗をかいていた。

そして、千代は裕二の船にそつと乗った。

「中を見てもいいですか？」

「はい。今は船の手入れをしていて、船を走らすことはできませんので、中をお見せするぐらいしかできないんです」

「お仕事の最中に、わがままを聞いていただいて、ありがとうございます」

「いえ。あー……それじゃあ、私は作業の続きをしてもいいですか？ 機械類などに触れなければ、あとはご自由にご覧ください」

「はい、ありがとうございます」

そして、裕二は翌日の漁のためにまた準備を始めた。

「おーい、裕二ー！」

と、そこへ、裕二に声をかける人物がまた来た。

今日は人がよく来るなーと思いつながら、裕二は顔を上げると、そこには見知った顔があった。

「晋じゃないか！」

裕二は驚いて、座りかけていた腰をまた浮かせた。

「よお、久しぶりだな」

高校までを一緒に過ごした友人の石田晋がいた。

高校卒業して以来会っていなかったが、面影はあったので、すぐ裕二にはわかった。

「どうしたんだよ。全然こっちに来なかったのに」

「まあ、何だ。あれだよ」

「あ……」

晋が珍しく歯切れの悪い言い方をしていたので、変だなと考えを巡らし、裕二は思い当たった。

そういえば、晋の父親が死んだ、という話を聞いていたのだ。

田舎だから、そういう情報は早い。

また、漁師仲間であったので、なおさらだ。

「あー……この度は……」

「そんな気遣わなくなつていいつて。ったく、お前は相変わらずだよな……」つて思つてたけど、それでもないらしいな」

晋が意味ありげに口の端を持ち上げて笑う。

裕二は不審に思つて、晋を見たが、その視線の先をたどると、意味がわかつた。

視線の先には、千代がいたのだ。

「違う。彼女は、ここの地主の娘さんで、夏休みでこっちに来たらしく、さっきたまたま声をかけてもらったただけだ」

「声かけられちゃつたの、ゆうちゃーん」

「その呼び方、やめろ！」

晋がますますからかうような笑みを浮かべるので、裕二は思わず怒鳴つた。

すると、後ろから視線を感じた。

千代が驚いて、こちらを見ていた。

「あ、すみません。き、気にしないでください」

裕二は慌てて、笑顔を取り繕い、千代にそう言った。

が、海側にいた千代は、笑顔で裕二と晋に近づいてきた。

「はじめまして。私千代つていいいます。お友達ですか？」

「友達……」

「そうそう、小さい頃から高校までずっと一緒にいたんだよ。俺は石田晋つていうんだ。よろしくね」

「はい」

裕二がしどろもどろになっていると、晋が横から入り、千代に握手の手を差し出した。

千代は笑顔でそれを取つた。

「今こいつから聞いたけど、夏休みでこっちに来てるんだって？
大学生とか？」

「はい。そうなんです」

「大学、とか？」

「はい」

「えー、俺と一緒にじゃん。したら後輩だね」

「本当ですか！ それは偶然ですね」

裕二は、完全に二人の会話を聞くだけになっていた。

晋は昔から、人と話したりするのがうまく、学校でも人気者だった。

だが、自分はまず話すことが不得手で、さらに気が回らないので、あまり友人も多い方ではなかった。

未だに、なぜ晋と自分がこのように話すようになったのかわからないぐらいだ。

確か、最初晋から話しかけられたはずなのだが。

裕二は、そんな晋がうらやましかった。

たぶん千代も、話し上手の晋の方が、一緒にいて楽しいだろう。

そう思い、裕二は静かに作業に戻ろうとした。

が、それは晋によって止められた。

「それにしても、何で裕二に声かけたの？ 船に興味あるの？ 若いヤツは確かに少ないけど、何で裕二に声かけたの？」

こつという聞きづらいことも、ストレートに聞けるのが、晋の強みだと裕二は思っている。

裕二はかなりひやひやしていた。

「海は好きですが、実は船の知識は全然ないんです。というより、私は裕二さんの船に乗って見たかったので」

「んー？ それはつまり逆ナンしたっていう風に聞こえるんだけど？」

「そうですね。裕二さん、とても格好よかったものですから。仲良くなりたかったんです」

「へえー、今時のお嬢さんは、随分積極的だなー。おい、裕二、よ

かったなー。顔はいいからな、お前」

晋は裕二の肩をトントンと叩いたが、裕二はかなり深刻だった。そのようなことを言われたことがないため、動揺していたのもあった、が。

積極的とかそんな問題じゃない。

いや、確かに積極的と言えばそうなのだろうけど。

裕二は、この千代という女性には、何だか勝てないような恐怖感にも似た予感をひしひしと感じていた。

海（晋視点 番外編）

二人の人間が持つ海のイメージはまるで違ったものである。当たり前前のこと。同じ思考の人間なんていないのだから。

だが、それ故に二人の間にもまた海がある。広くて果てしない海がある。

人は互いの海原を航海し、互いに自分の目的を見つけていく。しかし、その海を決して渡ることができない人もいる。

その海がもし架空であつたなら、その海に出ること自体不可能だからだ。

海が架空ということは、その海の持ち主自身もまた架空である。いや、むしろ、自分が海だと思っていたのが、実は作り出された海だとしたら。

自分が信じていた相手が、実は全く性格の違う人物だとしたら。その海を渡りきることは不可能だ。

いつまで経つても、果ての見えない海を渡っていくしかない。

また、その架空の海を作り出してる本人もまた架空の自分に食いつぶされる危険がある。

架空の海で嵐が起きた時、人は簡単に飲み込まれてしまう。架空の海を作り出す時、自身の記憶をその海の底に沈める。

それが、自身の運命を先天的に決定しているということも知らず。記憶は自身を決定づける。

それによつて自身が定められ、世界が定められる。そして、自身にある海によつて世界との関わり方が決まる。

海を恐れるなら、外には出ず、海を恐れないなら様々な世界を見ることが出来る。

彼らは、自身が持っているこの海がどれほど恐ろしいかを理解することができずに、今を生きる。

海が私にとって母なら、森は父だった。
森は私にとって恐ろしい存在だったから。
私を、取り込んでしまうように感じたから。
それは、私が父に圧倒的な大きさを感じていたということ。

私の生まれた所は、海も山もある所だった。
だから夏には、海にも山にもよく遊びに行ったものだ。
この港にも何回も来て、魚釣りをした。
十数年以来の故郷に、ただ懐かしさが蘇る。
父と仲違いをして家を飛び出してから、故郷には一度も帰らな
った。

それがなぜ今ここにいるのか。
母から突然便りが届いたのは先週のことだった。

お父さんが亡くなられました。

今もそのフレーズだけは頭に焼きついて離れない。
手紙にあった文字の形さえも思い出せる。
そして、私は父の葬儀が行われるため、こうして帰郷したとい
うわけだ。

久しぶりに地を踏む故郷は、懐かしい思いを感じさせもしたが、
同時に自分は今もう別の土地のものになってしまったんだ、とい
うことを実感させた。

それは、私にとっては恐怖に似た感覚を味わわせた。
見るものが、見たことはあるけど私を迎え入れていないように思
えた。

私が生まれた家でさえも。

葬儀の前日なだけあって、家は忙しそうに動く人々がいた。なんだか声がかげづらく、玄関に立っていると、気づいて声をかけてくれたのは、母だった。

「あら、晋しんちゃん、来てくれたのね。ちょうどよかったわ。今人手がいるの。手伝ってくれるかしら」

父が死んで、母は気落ちしているものだとばかり思っていたが、予想に反して、あの頃と変わっていない元気な母がそこにいた。

私は少し呆気にとられていたが、母がすぐに家の奥へと消えてしまったので、あがって手伝うことにした。

そしてそのまま葬儀の日になってしまった。

準備で忙しく、母と話すことなく今に至ってしまった。

葬儀の後だって、親戚が集まっているのだから、私にも話がふられることだろう。

予想通り、そうだったわけだが。

私が今までどうしていたか、その間の村の様子などを話していた。

仕事で大勢の人と飲むことはあるが、親戚が集まる、という雰囲気はまた違う。

この時も、私は懐かしい気分に浸っていた。

父と仲違いがして、故郷に長い間帰らなかったが、決して故郷のことが嫌いになつたわけではない。

ただ単に、私の意地だった。

仲違いした理由も、父が私の進学に反対したからだ。

家の仕事を継ぐとばかり思っていたから、高校を卒業したら、すぐに家の仕事の手伝いをしてほしかったらしい。

だが、私は家の仕事を継ぐつもりはなかった。

私は、この村から離れて、一人で生きてみたかった。

だから、私は父から、この故郷から離れることにした。

そして、宴もたけなわ、皆の雰囲気が落ち着いてきた所で、私は母の様子が気になり、台所を覗いてみた。すると、そこに母はいなかった。

「すみません。母はどこに行きました？」

「ああ、お母さんならちよつと外に行くって出て行ったよ」

「そうですか。ありがとうございます」

私は母の後を追って、外に出てみることにした。

玄関から外に出てみて、出てみたはいいが、どこに行けばいいか見当がつかない。

母はどこに行ったのだろう。

思えば私は母の好みなど何も知らない。

何の食べ物が好きで、何が苦手なのか。

どういう場所が好きで、仕事の他に何をしているのか。

今まで自分のことばかり気にして、他の誰かがどう思っているのか考えることがなかった。

特に、一番近い存在である両親のことについては。

両親のことも知らないし、私を育てくれたこの土地のことも私は何もわかっていないのではないか、と思い至った。

母の行きたいような場所を考えようにも、何も思いつかなかった。子供の記憶しか残っておらず、大人が好んで行きそうな場所など、私は知らなかった。

私は、もしかしたら過去に何か大きい思い違いを残したまま、今まで生きてきたのかしれないと思った。

それを確かめるために、母を探すついでにこの町を見て回るのもいいかもしれないと思った。

まずは、自分の家から見て回ることにした。

庭に行ってみると、なんとそこに母がいた。

これから村を回るぐらいの気持ちだったのに、いきなり目的が果

たされてしまって、私は勝手に拍子抜けしていた。

母も私に気づいたようで、複雑そうな笑みを浮かべて私を見た。

「何だ、晋ちゃん来たの」

「ああ。母さんを探しに来たんだよ」

母は少し驚いたような顔をしたが、今度は素直な笑みを浮かべた。

「あらそう。いきなりいなくなつて心配した？」

そういえば、母はこういうお茶目な人だったな、と改めて思った。もう孫がいてもおかしくない年なのに、私がここを離れた時のように若々しい。

私は、少しそんな母を眩しく見ていた。

「いや、みんなもういい感じになってきているから、そろそろ片付けの時間かと思つてね」

「まだみんなにはのんびりしてもらつてもいいじゃない。それより晋ちゃん見て。あんたのいる所じゃ、こんなにお星様見えないでしょ」

そう言つて母は空を仰いだ。

私もつられて、同じように黒い空を見上げた。

黒い、と言つても、その黒にも色がある。

どこか青っぽくもあり、手を伸ばすと吸い込まれそうな深い色だった。

まるで、深い海の底にいるような気分だった。

そして、その海の底には明るく光る星々が無数にあった。

深い海に住む生物達のようにも、それは見えた。

私はしばらくそれを言葉なく見つめていた。

「……確かに、こんな空は見れないな」

私が小さくそう呟くと、母が自慢げに私を見た。

「でしょ？ 今のうちに見ときなさいよ」

「……………どういふこと？」

私は何か母の言葉に引っかかるものを感じ、母の方を見て、問い

返した。

母も私の視線を受ける。その笑みは変わらず。

「深い意味はないわよ。ただ、今見えるものがずっと続くとは限らないし、また見れるとは限らないから、忘れないように目に焼き付けておきなさいってことよ」

その言葉に偽りはないようだった。

母は若く見えるだけあって、嘘を隠すのが下手だった。

まるで生娘のように、すぐ顔に出るのだ。

だから、母の顔を見て、私は嘘じゃないと感じたから、それを信じることにした。

実際、母の言うことは間違っていないと思った。

「……そうだね。この村も、変わっていないように思ったけど、みんな変わってしまったんだね」

「そして、晋ちゃんも、変わったのよ」

「………父さんは俺のこと何もわかってないと思ってたけど……俺も何もわかつちやいなかったんだ」

「………あんたら二人、似てるのよ。頑固で意地っ張りな所が」

母は、しょうがないわね、というようにため息を吐いた。

私はそれに苦笑いを思わず浮かべてしまった。

「………そうだね」

「でも、お父さんはわかってらしたわよ。あんたが半端な気持ちでここを出て行ったんじゃないってことは」

母の言葉に、私は表情を固くした。

母もそれを感じ取って、笑みは何か重いものを含んだ深いものになった。

「親は何でもわかってるのよ。口ではわかってないようなこと言っても。あんたらより長く生きてるんだもの。わからないわけないでしょ」

私は母の言葉に、また天を仰いだ。

思わず涙が出そうになり、それを隠すためだ。
まるで昔の歌そのままのことをやった。
でも、その気持ちも少しわかった気がした。

「……父さん、俺のこと許してくれるかな」

ごまかすために、さらに言葉を紡いだ。

少し声が震えているのが自分でもわかった。

もしかしたら、母はわかっていたかもしれない。

「許すも許さないも……あんたはどんな時だって父さんと私の子供
よ」

その時、私の視界に広がる星空が滲み、空が白くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299t/>

海に浮かぶ家

2011年5月29日12時56分発行